

# 特集のとびら

## 「自己内対話とコミュニケーション」

教育研究所主任指導主事兼研修係長 井山直之

さいたま市学校教育ビジョンでは、「知」「徳」「体」「コミュニケーション」のバランスのとれた子どもをはぐくむことを基本理念としている。豊かな人間関係をつくるための「コミュニケーション」を加えたことがその特色の一つである。今回の特集にちなみ、子どもたちに、『知（確かな学力）』と『コミュニケーション（豊かなかかわり合い）』をはぐくむことについて考えてみた。

政治学者の姜尚中氏によれば、深く「人とつながる」ためには「自己内対話」が必要であり、「自己内対話」がないと他者とつながるのは難しい。逆に、「他者とのかかわり」がないと、「自己内対話」は続かないという。

（平成21年12月12日朝日新聞朝刊より）深い「人とのつながり」を「コミュニケーション（豊かなかかわり合い）」とした場合、その実現のためには、「自己内対話」と「他者とのかかわり」の両方が必要ということになる。

一般的な「コミュニケーション」の目的は、情報、知識、感情、意見などを分かち合い同じものを持ち、「人とつながること」である。しかし、人にはそれぞれに「コミュニケーション」の基礎となる自分自身の「枠組み」があり、自分の「枠組み」の中で相手に正しく伝えたと思っても、相手は相手の「枠組み」の中で解釈するので別の意味になる可能性がある。「コミュニケーション」の本質とは、分かることだけをやり取りするのではない。自分の「枠組み」を「自己内対話」によって押し広げて、分からないことも分かることに組み入れながら、他者と深くかかわっていくことである。このことを、子どもたちに理解させることが大切である。また、この「枠組み」を広げるためには、一般的な基礎学力とともに思考力、判断力、表現力等からなる「知（確かな学力）」を子どもたちにはぐくむことも大切である。豊かな「知」は「自己内対話」を深め、自己としっかり向き合うことによって、自分の「枠組み」が広がり、豊かなコミュニケーションの実現につながる。「知」と「コミュニケーション」には深い関連がある。人と向き合うのは、自分とも向き合うことであり、自分と深く対話し自己を省みつつ他者と深く対話し、社会との絆（きずな）を感じることで人は成長していくのである。

このことは、インターネットや携帯電話に囲まれ、表面上は他者と手軽にかかわれる時代に生きる子どもたちに「コミュニケーション（豊かなかかわり合い）」をはぐくんでいく上で重要なポイントである。

「知（確かな学力）」と「コミュニケーション（豊かなかかわり合い）」をはぐくむ